

明治後期における 「新婚旅行」言説についての一考察

A Study of “Honeymoon” Discourse in the Late Meiji era

森 津 千 尋

日本で「新婚旅行」という言葉が使われるようになったのは明治 20 年以降であり、最初は英語 honeymoon の訳語として登場した。「新婚旅行」に限らず、この時期には西洋からもたらされた物や概念を指す訳語が作りだされ、「恋愛」「家庭」といった言葉もこの時期に誕生した。そして知識人の間では、理想としての「恋愛結婚（当時は自由結婚）」また夫婦や親子が愛情で結びついた「家庭（ホーム）」が論じられ、それら概念を背景に「新婚旅行」は語られるようになっていく。またこの時期には上流階級を中心にレジャー文化が拡がり、多様化する旅の一形態としても「新婚旅行」は受け入れられていく。

当時「新婚旅行」に行けたのは限られた一部の上流階級のみであったが、新聞や家庭小説などで「新婚旅行」が取り上げられることで、実際には「新婚旅行」に行けない人々にも「新婚旅行」のイメージが認知されていったことが考えられる。

キーワード：明治後期、新婚旅行、恋愛、家庭、新中間層 レジャー

目 次

はじめに

I 明治後期の「恋愛」と「家庭」

II レジャーとしての旅

III 「新婚旅行」の誕生

おわりに

はじめに

日本で最初の新婚旅行として、慶応 2 年、坂本竜馬とその妻おりょうの旅が、一般的によく知

られている（白幡 1996:155）。しかしこれは後世になってから二人の旅を見た時に「その旅は新婚旅行とも言える」という意味であり、当時龍馬たちが自分たちの旅を「新婚旅行」と認識していたとは考えにくい。というのも、広田によれば「新婚旅行」という言葉が人々の間で定着していくのは明治後期以降であり、それ以前の江戸末期においては、そもそも「新婚旅行」という概念自体が存在しないからである（広田 1969:43-48）。

では、「坂本龍馬が新婚旅行に行った」という言説はいつ頃でてきたのだろうか。はやいものでは明治16年、坂崎鳴々道人（坂崎紫瀾）が龍馬を題材にして書いた歴史小説『汗血千里駒』の中に登場する。筆者である坂崎は、土佐の藩医の息子であり、高知新聞の編集長を務めた明治の知識人である（松下 2002:44）。この小説の中で、龍馬とおりょうが、小松や西郷に会うため南九州へ旅にでたことを「ホネー、ムーン」と表現している（坂崎 1883:3）。これ以後、龍馬たちの南九州への旅が「日本で最初的新婚旅行」といわれるようになる。

このように明治期には、西洋起源の概念やそれを表す言葉がまず知識人に受容され、彼らがその言葉を新聞・雑誌、小説で使うことで、一般読者の間でもその言葉や概念が認知されていく。

本稿では明治期の「新婚旅行」を検討するため、まず「恋愛」という言葉の登場、そして「恋愛」と「家庭」との接合、さらに旅の多様化について整理をおこなう。その上で、「新婚旅行」という言葉が、明治期のメディアの中でどのように人々に認知されていたのかを明らかにしていく。

I 明治後期の「恋愛」と「家庭」

1 「恋愛」の発見

「恋愛」という言葉は、古来より日本に存在していた言葉ではなかった。柳父によれば、「恋愛」が日本の文献で最初に登場するのは、明治3-4年に出版された中村正直訳の『西国立志編』（S.Smiles:Self-help,1959）の中であり、また辞書では、明治20年出版の『仏和辞典』の中でamourの訳として登場した（柳父 1982:95）。

明治期の西洋文明移入過程では新しい概念が取り入れられ、それを表す造語が数多く生み出されたが、「恋愛」もまたloveやamourといったキリスト教的な愛情関係をあらわす訳語として発見された。もちろんそれ以前の日本にも男女の思慕は存在していたが、それは「色事」として、遊里や祭りのような時間・空間的に限られた場面でおこる異例の心理として位置づけられていた。それらの感情と「恋愛」の違いは、「人生において主要な意味をもち社会における自我の拠点として論じられるかどうかである」と井上は指摘している（井上 1998:222）。

では、新しい概念・言葉である「恋愛」はどのように明治期の社会の中で論じられたのだろうか。「恋愛」という言葉が登場する過程において、まず男女間の思慕は「色」から英語の「ラブ」もしくは「ララブ」という表記へと変化していく。佐伯は坪内逍遙の『当世書生気質』（M18刊

行)を例にあげ、それまで使われていた「色」「恋」という言葉は、肉体的関係を含んだ外的結びつきの「下・中の恋」をさす言葉として限定的に使われ、一方「ラブ」「ラアブ」という言葉は、相手の人格など内面的要素に魅かれ、精神的に結びついた「上の恋」をさす言葉として使われたと分析している（佐伯 2010:8-10）。

さらに明治 23 年 10 月『女学雑誌』では、巖本善治が翻訳小説『谷間の姫百合』の批評の中で「ラブ（恋愛）」について論じている。巖本は「ラブ（恋愛）」は日本通俗の「恋」という言葉とは異なる清く正しい情であり、「深く魂（ソウル）より愛する」ことを指し、このような「love=恋愛」が意味するような情はこれまでの日本にはなかったと述べた。以後「恋愛」は『女学雑誌』の主要なテーマの一つとなり、明治 25 年 2 月には、同誌において北村透谷が「厭世詩家と女性」を発表する。北村は「恋愛は人生の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を描き去りたらむには人世の何の色味あらむ」と述べ、日本で最初の近代的恋愛を表明した。

このように明治 20 年代には、知識人の間で新しい男女の関係として「恋愛（＝ロマンティック・ラブ）」が受容されるようになる。しかし、日本初の近代的国語辞典とされる『言海』（M24 編纂）には、まだ「恋愛」は採録されていない（山根 2008:318）。さらにその後『日本大辞書』（M26 年編纂）、『日本大辞林』（M30 年編纂）でも採録されておらず、この時期の「恋愛」の流行は、知識人の間における「恋愛」という言葉の流行だったと考えることができる（柳父 1982:100）。

2 「恋愛」と「家庭」の接合

「家庭」という言葉が home の訳語として使われだしたのも明治 20 年代以降である。巖本善治は「恋愛」を賛美する以前より、愛情を基盤とした夫婦中心の家族関係を称揚しており、結婚においては「和楽団欒」を目的とした「家庭（ホーム）」を建設すべきと論じていた。ノッターが指摘するように、そもそも巖本の興味は「恋愛」そのものにあつたというよりも欧米の愛にあふれる家族像にあり、巖本の『女学雑誌』における「愛」や「恋愛」についての主張は、最初から「家庭（ホーム）」と表裏一体をなすものであつた（ノッター 2007:5）。

そして明治 20 年代後半には、徳富蘇峰による『家庭雑誌』（明治 25-31 年）、『日本の家庭』（明治 28-33 年）、堺利彦による『家庭雑誌』（明治 36-42 年）、『家庭之友』（明治 36-41 年）など、「家庭」という言葉を冠した雑誌が次々と発行された。さらに明治 30 年代には、「家庭小説」という通俗的な読み物のジャンルも登場し、「家庭」という言葉は定着していく（瀬地山 1996:153. 小山 1999:29-31）。「家庭論」は『太陽』などの総合雑誌においても論じられるようになり、ここでは「近代化・産業化、そして西欧化への志向を背景として「家庭」という言葉に象徴される新しい家族像が望ましいという意識の出現」がみてとれると牟田は指摘している（牟田 1996:70）。

以上のように、明治中期から雑誌等のメディアを通して、愛ある夫婦関係を前提とする「家庭（ホーム）」という新しい概念が登場する。そして「家庭（ホーム）」を築くためには、親が結婚相手を選ぶのではなく、結婚する本人が相手を選ぶべきだという考えから「恋愛結婚」（当時は「自

由結婚)が誕生する(ノッター 2007:49)。ここで「恋愛」と「家庭」という言説が接合され、「恋愛」において内面的に結びついた平等な男女の関係は、そのまま「家庭」内の夫婦の関係に置き換えられるようになる。

さらに明治末期には、「家庭(ホーム)」を実践していく主体として新中間層が登場する。この新中間層とは、日露戦争後、産業化が進展し都市に人口が集中していく過程で誕生し、資本家と賃労働者の中間に存在する頭脳労働者であり、職業は官公吏、教員、会社員などであった(森岡 2004:62)。また新中間層の家族は、サラリーマンの夫と専業主婦の妻で核家族率が高く、子どもたちの教育を重視し、家庭での消費生活に関心をむける傾向があり、彼らが大正期の大衆文化を担っていくのである(小山 1999:39-40,59)。

II レジャーとしての旅

1 多様化する明治の旅

江戸時代の旅は伊勢参りをはじめとした「信仰・巡礼の旅」が中心であった。しかし明治期にはいと、汽車や汽船の発達に伴い人々の旅行先は避暑地や保養地へと広がっていく。明治10年頃から鉄道を用いた温泉旅行が行われ、草津、伊香保、箱根、熱海等の有名な温泉旅館が広告をだすようになる。例えば、明治26年7月27日の『東京日々新聞』『都新聞』には温泉の効能や交通の便、不良車夫や馬丁の注意までを記した伊香保温泉の広告が掲載されている(今野 1986:189-190)。

また明治20年頃には、軽井沢等が在留外国人の保養・避暑地として開拓され、それに続くように華族など上流階級がその近郊に別荘を建てた(東 2004:30)。当時、日常の生活空間から転地することで療養、健康増進するという考えがあり、転地先は山だけではなく「塩湯治」として葉山や大磯などの海岸にも広がっていった。さらに明治21年には週末レクリエーションが流行し、都市の官吏や職工など、ある程度休暇や給与が保証された人々の間で海水浴が広まっていく(東 2004:33)。特に大磯海岸は人気を集め、明治28年の夏には5万人以上の人出があったという(下川 2000:237)。

またこの時期には近代的な学校制度が整備され、学校団体による臨海学校や修学旅行も行われる。明治19年、東京高等師範学校が千葉銚子に11日間の旅行に行ったのを皮切りに、高等師範学校で修学旅行が広がり、明治21年には文部省令により尋常師範学校の恒例行事として修学旅行が規定された。こうして学校教育を通して旅や海水浴を体験することで、レジャー活動が身近なものとなっていった(白幡 1996:121)。

さらに旅先は海外へも広がっていく。例えば朝日新聞は明治39年に「満州・韓国視察旅行」を主催し、明治41年にはトマスクック社と提携して「世界一周旅行」を実施した。この世界一

周旅行は旅費だけで2100円もかかる贅沢な旅であったが、女性を含む54人が参加し、新聞に旅行記も掲載された（有山2002:90）。この旅行に参加できたのはごく限られた人々ではあるが、このような旅行が現実に存在するものとしてメディアで報じられることで、観光旅行（ツーリズム）が理念的に人々の間に浸透していったと有山は指摘している（有山2002:101）。

2 書籍の中の旅

旅の多様化にともない旅行案内書も変化していく。これまでの旅行案内書は徒歩による「道中記」が中心であったが、明治22年に東海道線が開通すると、旅行の案内は道中記から鉄道案内、そして目的地の詳細案内へと転換していった。

その中でも野崎左分が明治25年に出版した『東海東山漫遊案内』は、明治32年まで20版を重ねたベストセラーである（前田1980:246）。案内書の冒頭では、転地療養は健康な人間にも効果があるため、「中等以下の人々」も費用がかかる贅沢な遊びだと思わず、近くの温泉や海水浴での避暑・保養をするよう薦めている。そして箱根、日光、熱海、伊香保、富士など「東京近郊の温泉、海水浴場其他避暑遊覧の價ある各地」を紹介し、各旅館の室料や、距離にあわせた人力車賃等の情報を掲載している。（野崎1892）。

また小説の中にも旅は登場する。ベストセラーとなった尾崎紅葉の『金色夜叉』（明治30年刊）では、寛一お宮の別れの舞台は旅先の熱海であり、また翌年発表された徳富蘆花の『不如帰』は、新婚旅行先の伊香保温泉から物語が始まる。五井は『明治文学全集総索引』で温泉地名や避暑地名を引いてみると、花袋、藤村、子規、眉山、虚子など明治30年代に活躍した作家の名前が多いことを指摘し、当時の小説は旅を物語の背景として描き、登場する具体的な地名は読者にとっても馴染みあるものだったとしている（五井2000:31）。このように明治中期以降、旅行案内書や小説、新聞を通して旅のイメージは拡張されていく。

III 「新婚旅行」の誕生

藤森は、柳田国男の「旅行の進歩および退歩」という講演の内容を引用しながら「明治20年から30年は近代という「新文化」による「楽しみ」の爲の旅行時代の始まりであり、観光旅行（ツーリズム）の幕開けだった」としている（藤森1997:51）。また他方では「恋愛」という新しい言葉が生まれ、その延長として夫婦の愛情あふれる「家庭（ホーム）」の理念がメディアを通じて広がるなか、新しい風俗として「新婚旅行」が登場する。

明治10年頃には小説や新聞・雑誌で、新婚期間として「^{ハネームーン} 歓娛月」「^{ハネームーン} 婚後の月（Honeymoon）」「^{ハネームーン} 新婚月」が使われるようになる。そして明治20年頃に新婚期間の旅行として「^{ハネームーン} 甘月遊」「^{ハネームーン} 甘露の月（ハネームーン）」「^{ハネームーン} ハネームーン（婚後遊）」「^{ハネームーン} 蜜乳月」「^{ハネームーン} 結婚旅行」「^{ハネームーン} 新婚旅行」「^{ハネームーン} 初契月」

という言葉が使われだす（広田 1969：44-47）。

日本語辞書に「新婚旅行」が採録されるのは明治 40 年頃で、国語辞典『辞林』（M40. 三省堂刊）では「新婚の男女が相携えて旅行すること、西洋の風儀を移したるものにて、互いの親情を豊かにするためといふ」とある。さらに『大辞典』（M45 高山堂刊）では「新タニ結婚シタ男女ガ揃ツテ旅行スルコト。モト西洋ノ風俗カラ移ツタ。英語 Honeymoon コレヲ其儘ほねむうん又ハほねむうんナドシテ博へ、又、直訳シテみつゝき（蜜月）トスル（原文ママ）」と記されている。このように「新婚旅行」は、明治後期において西洋起源の言葉・風俗として登場するが、以下本章では、新聞、小説等のメディアの中での「新婚旅行」について検討していく。

1 新聞に登場する「新婚旅行」

ここではまず読売新聞を中心に日本人の「新婚旅行」についてみていく。

まず日本人の「新婚旅行」として最初に読売新聞に登場するのは、明治 24 年 2 月の福沢諭吉子息と兵庫県知事娘の「新婚旅行」である。神戸の料亭常盤花壇で結婚式を行った翌日、須磨に「新婚旅行」に行ったという内容である（「福澤捨次郎氏の結婚」『読売新聞』M24.2.12）。さらに小説家の田澤稲船と山田武太郎（美妙）が作並温泉へ「甘露月」、東京音楽学校校長夫婦の「新婚旅行」の記事が掲載されている（「女作者の天縁」『読売新聞』M29.1.1）（「渡邊音楽学校長の新婚旅行」『読売新聞』M33.12.19）。

また皇族や華族の「新婚旅行」記事もある。明治 33 年の東宮の「新婚旅行」をはじめ、小松宮の沼津別荘への「新婚旅行」、北白川宮の伊勢、奈良、京都への「新婚旅行」の記事が掲載されている（「東宮御乗車の汽車」『読売新聞』M33.4.6）（「小松若宮殿下の新婚旅行」『読売新聞』M38.6.30）（「北白川宮御新婚旅行」『読売新聞』M42.5.18）。

そして、海外へと旅立つ新婚旅行記事もある。明治 26 年、大倉財閥の創始者である大倉喜八郎の娘とその娘婿の高島小金治がアメリカへ「新婚旅行」に行くという記事（「米国へ新婚旅行」『郵便報知』M26.3.31）。さらに日露戦争後に株で富を築いた神田鍾蔵が、「最初新婚旅行は内地の筈なりしも女子大学家政科出身の新夫人が承知せず」しぶしぶ海外旅行を決心したという記事もある（「神田夫人の洋行姿、欧米へ新婚旅行」『読売新聞』M42.5.18）。また新聞ではないが雑誌の『婦人画報』でも、男爵九条良致と新夫人の武子（西本願寺 22 代目法主大谷光瑞の妹）が欧州へ「新婚旅行」に行く記念写真が掲載されている（「新婚旅行の門出」『婦人画報』M43.2.1）。

以上の新聞記事から、実際に「新婚旅行」に行ったと報じられるのは皇族や華族、もしくは実業家や上級官吏の子弟であり、「新婚旅行」を実践する主体は上流の人々であったことがわかる。さらに「新婚旅行」が新聞でとりあげられることで、当時の新聞読者層つまり上流階級ではないが比較的教養のある人々の間にも「新婚旅行」という言葉が浸透していったことが考えられる。特に若い女性は憧れをもって受け入れており、例えば明治 39 年には次のような女性教育家の「婚約破談」記事が掲載されている。

女性教育家は舅となる可き某へ書を寄せこれが自分の理想であるとす七ヶ條を書き列て送りし中に新婚旅行をする事、妾ハ現職を継続する事、新夫婦ハ結婚後両親と別居する事、女中二人を必ず雇入る、事とあるに某も花婿殿もこれは、と呆れて開た口も閉がらず未だ興入れもせぬ前から之れでは大変だこの勢いで乗込んで来た日には亭主は素り舅も姑も在ったものではなく女権とやらを振回されて顛手古舞してはと早速媒酌人に破談を申し込みたり（以下略）。（「理想発表が破談」『読売新聞』M39.7.8）

さらに記事では、破談になった女性は女子高等職業学校卒業であり「ハイカラ主義」が行き過ぎたと批判する。この記事からは、当時の女学生（卒業生）が「新婚旅行」という言葉を認知しており、それを結婚する際の理想条件としていたことがわかる。

また明治43年には「少年少女が夫婦ごっこをして新婚旅行」という記事がある。その内容は、ままごと遊びをしていた8歳の子どもが「毎日同じ所ではおもしろくないと話にきける新婚旅行を思立ち」ままごと道具等をふろしきに包んで家出し神社でみつかったというものである（「八歳の少年少女駆け落ちす」『読売新聞』M43.12.8）。少女の父親は漢学塾の舎長であり、少女本人の所持金が1円50銭と報じられているため中流以上の家庭の子女であるが、小学校に通う子どもでさえ「新婚旅行」を知っていたことがわかる。

このように「新婚旅行」への憧れがみてとれる記事の一方で、結婚していない男女の逃避行を、記者が皮肉として「新婚旅行」と表現した記事もある。

例えば、会社員が金を持ち出して芸者と駆け落ちした様子を「新婚旅行の味を占め名古屋見物から伊勢参宮、京都、奈良も巡覽して去る四日より舞子の浜に至り萬亀楼に宿をとりて睦まじく語らいたる」と説明する記事（「舞子の別れ」『読売新聞』M39.6.10）。また質商の孫娘と三越店員との駆け落ちを「草津温泉へ新婚旅行と洒落たれば、後で親類の者が彼んなへナチヨコに娘はおろか財産迄ふんだくられて堪るものかと大騒ぎ」と説明する記事である（「恋病で草津行」『読売新聞』M42.9.24）。これら記事に出てくる男女は、結婚はしていないが「恋愛」関係にあり、「新婚旅行」のイメージの中には「恋愛」が含まれていることが推察できる。

ここまでみてきたように、明治期の新聞に登場する「新婚旅行」記事は、大きく3つに分けることができる。まずは皇族、華族、実業家などの上流の人々が実際に「新婚旅行」に行ったという記事、次にそのような「新婚旅行」に憧れた新中間層の人々を報じた記事、さらに恋愛関係を前提とした男女の旅を「新婚旅行」と表現してた記事である。

これらの記事からわかることは、上流階級による「新婚旅行」の実践と彼らの生活様式や風俗を理想とする新中間層のまなざしである。ウェブレンが、「各階層の成員はその次の上位の階層におこなわれている生活様式を見苦しくない生活の理想としてうけとり、その理想にかなった生活をおくるようにつとめる」と述べているとおり、「新婚旅行」という上流階級が取り入れた新

しい風俗が、新中間層の間で理想とされたことが考えられる（ウェブレ 1961：85）。

また一方で、「恋愛」による逃避行を「新婚旅行」と称した記事では、「自由恋愛」や「ハイカラ主義」への皮肉として「新婚旅行」という言葉が使われており、当時「新婚旅行」や「恋愛」に対し、依然として批判的な捉え方もあったことがわかる。

2 結婚指南書に登場する「新婚旅行」

明治33年5月10日、後に大正天皇となる嘉仁親王の婚礼が行われる。その一年前の明治32年8月には御成婚の諸儀礼について議論する皇室制度調査局が設置され、翌年33年4月には皇室婚嫁令が公布される。この御成婚への人々の関心は高く、これを機に神前結婚式が拡がり、またこの時期に多くの結婚式や結婚指南書が出版された（平井 2011：138、道前 2014：10）。

藤田一郎の『新撰結婚式』もそうした流れの中で出版された一冊であり、序文では「東宮殿下御成婚にあたり皇室制度調査室伊藤博文総裁の一助となれば」と記されている。この『新撰結婚式』の中で「新婚旅行」は以下のように述べられている。

結婚式の終りたる次日よりは新夫婦の情交を厚からしむるが爲に其父母たる者は一切夫婦の身上に關渉すべからず一周間若くは二三週間は夫婦の爲んと欲する所に任せ置へし昔へは結婚後新夫婦をして名所古跡を探らしめ旅行をなさしめたり（中略）新婚旅行は欧米人のみ舉行するものと思の外我國は古代より行はれたる者なり應仁以来の大亂の爲政治紊乱惡漢横行の故を以て中絶したる者と斷按せらる是又再與すべき良風俗なり（以下略）。（藤田 1900:86-87）

ここでは、「新婚旅行」は日本でも古来より行われていたものであり、一時的であるが従来の「家」制度から脱して夫妻二人の関係を深めるよい風俗だと紹介されている。

また明治44年刊の武田桜桃（鶯塘）の『結婚の枝折』でも、「新婚旅行」は昔から行われており時間とお金に余裕があるなら行った方がよいと次のように述べる。

是が何處を見ても他人許りの旅路に出たなら、自然二者接近する機会が多いので。「あなた」と言ふのさへ恥ずかしかつたのが、「やどが」「うちのが」など、明白に言へる事ができるようになるのであります。名は夫婦でも、結婚後日もまだた、ないのだから、打ち解けるに従ひ、まるで戀人同士が連れ立てる様に、蜜の如き甘き言葉を取り交わせて、実に此位楽しむなことはあるまいと思うのです（以下略）。（武田 1911:213-222）

ここでは新夫婦が打ち解けるために「新婚旅行」は有益だと捉えており、当時「恋愛結婚（自由結婚）」をする夫婦がまだ少なかったことがうかがえる。「新婚旅行」に行くことでようやく妻

や夫としての自覚ができ、「恋愛結婚」ではない新夫婦でも「まるで恋人同士」のように楽しめるのが「新婚旅行」なのである。

この2冊の結婚指南書では、「新婚旅行」は夫婦の情緒的・共感的結合を促し、和楽団樂の「家庭（ホーム）」を築くよい機会と位置づけている。ここでの「新婚旅行」は、「恋愛」や「家庭（ホーム）」といった明治期に誕生した新しい理念を取り入れながら、それ以前の日本でも「新婚旅行」が行われていたという矛盾も含んでいる。

一方、「新婚旅行」は特に必要ないとする結婚指南書もある。千勝義重の『理想と結婚』（M43）では「新郎新婦相携へて旅行する事がある、それには種々な理由もあろう、要するに金と暇とのある人がすることで、斯くまでにせねば所謂ハートの結合とやらが出来ぬといふ譯でもあるまい」としている。これは皮肉的に「新婚旅行」を捉えた新聞記事同様、「ハートの結合」を重視する「恋愛」や「家庭」を「ハイカラ主義」として批判的に捉える立場を示している。

3 小説の中の「新婚旅行」

次に小説に登場する「新婚旅行」をみていく。明治31年に出版されベストセラーとなった家庭小説『不如帰』は、新婚旅行で伊香保温泉に逗留中の男爵夫婦の会話からはじまる。『不如帰』は、この冒頭の「新婚旅行」に象徴されるように、幸せで仲睦まじかった新夫婦が、妻の病、周りの冷たい態度や企みのせいで離別していく物語で、単行本は10年間で100版を超えるベストセラーであった（『国民新聞』明治42年3月20日）。

また同じく明治後期に人気を集めた村井弦齋の『食道楽』でも「新婚旅行」は登場する。『食道楽』は、西洋料理や食材の紹介を通して新しい家庭生活の在り方を提示した小説で、春夏秋冬編の4巻あわせて10万部を超えた（黒岩2007）。その『食道楽続編 秋の巻』（M40）では、文学博士である主人公の友人が「新婚旅行」について次のように述べる。

我邦の結婚法は米国風の自由結婚では無い、多くは一二度の見合いで話しが極つた位のも
のだからお婿さんもお嫁さんも結婚するまでは未知の人だ、それが昨夜結婚を済ませて今
日は直ぐに遠方へ旅立ちをした處で双方共に何だか夢の様なものだ（以下略）。（村井弦齋
1913：126-127）

さらに主人公の友人は、結婚後すぐに「新婚旅行」に行くのは新婦にとって心身ともに負担が大きい、結婚後しばらくは新婦だけを里帰りさせるべきだと主張する。そして、心身ともに結婚後の「動乱」を鎮めてから「新婚旅行」に行く方が「両人が仲良くある事が出来る、此の旅は真に双方の交情を温めて生涯の楔になる」と言う（村井弦齋1913：127）。

この他にも、明治後期には「新婚旅行」を描く小説がいくつか登場する。明治34年には4つの短編からなる『新婚旅行』という小説集が発行され、そのうち「初ちぎり」と「蜜月遊」とい

う物語が新婚旅行中の夫婦を主人公にしている。

「初ちぎり」は、音楽家と会社員の新夫婦が大磯海岸に新婚旅行に出かける物語である。新婚旅行中、かつて新郎から新婦を奪おうとした金持ちの男と遭遇するが、新夫婦はなんとか切り抜け、それを機に互いの絆を再確認する。また「蜜月遊」は、社長令嬢とその会社の社員の新夫婦が、新郎の出身地である白河、仙台、松島を旅する。そこでもまた、高慢な医者夫婦と遭遇し、彼らの豪華な別荘に強引に招待される。そして新夫婦は、医者夫婦のように「富をひけらかすようないやらしい」夫婦にはなるまいと誓いあう。これらの小説では、「新婚旅行」を通して危機に遭遇し、それを乗り越えることで夫婦が団結する姿が描かれている。同様のストーリーがその他の小説『家庭小説・新婚旅行』(M40)、『世界的大競争』(M39)、『新婚無銭旅行』(M41)でも描かれている。

明治後期の小説において、「新婚旅行」は華族や実業家など上流の人々が行うものとして登場するが、上流階級の結婚のため、結婚前の「恋愛」についてはあまり描かれぬ(Sugiyama1993=2000:141)。しかし「新婚旅行」中に夫婦仲を邪魔する人物の登場等の問題が起こり、そして新夫婦が助け合いながらそれら問題を解決していく。夫婦が互いに絆を深め「家庭」を築いていく過程が描かれるのである。明治30年代から40年代にかけて、このような「家庭」をコンセプトとした小説が数多く出版され、それらは「家庭小説」と呼ばれた。牟田によれば、「家庭小説」の文学的評価は高くなかったが「大衆」的人気があり、その読者は都市の人々や知識人以外の広い層に浸透していた。そのため、新聞記事や結婚指南書に加え、「家庭小説」の浸透が「新婚旅行」の大衆的認知にも影響を与えていたことが考えられる(牟田1996:162)。

4 明治後期における新婚旅行の意味

ここまで明治後期のメディアにおける「新婚旅行」について検討してきたが、「新婚旅行」は二つの視点から位置づけることができる。

まずは旅への欲望が多様化していくなかで、「新しい旅」のひとつとして位置づけられた「新婚旅行」である。明治期においては、西洋文明の移入と交通網の発展に伴い日本人の旅空間が拡大し、旅は「信仰・巡礼の旅」から「レジャーとしての旅」「ツーリズム」へと変化する。そして上流階級による顕示的消費の一つとして「新婚旅行」が実践されるようになり、それがメディアを通じて伝えられることで新しい旅のスタイルとして理念的に「新婚旅行」が広がっていく。

また一方では、「恋愛」「家庭(ホーム)」という西洋的概念と結びついた「新婚旅行」である。「恋愛」と「家庭(ホーム)」は、男女が互いに敬愛し精神的に結びついた平等な関係を提唱しており、「新婚旅行」はそのなかに位置づけられた。ノッターは、日本の場合、「恋愛結婚」の媒介なしに近代的家族としての「家庭(ホーム)」が誕生したと指摘しており、そのため「新婚旅行」は「恋愛」期間の代替として機能していたことが考えられる(ノッター2007:112)。以上どちらの視点においても重要なのは、明治期に欧米の習慣、風習や文化を積極的に受け入れようとした上流階級、また知識人が文化的媒介者として大きな役割を担っており、さらに、新聞や雑誌、小説等、

大衆的なメディアがそれを拡めていったという点である。

おわりに

今回は明治後期の「新婚旅行」について検討してきた。明治期においては、旧来の封建的家族制度への批判、また一夫一婦論や廃娼論が提唱され、新しい家族の在り方が模索される。その過程のなかで、西欧思想から導入された「恋愛」「家庭（ホーム）」は、知識人の間で理想として拡がり、その中で「新婚旅行」も位置づけられていく。また、多様化する旅の形態の一つとしても「新婚旅行」は認知されていく。しかし実際に「新婚旅行」に行ける者は少なく、明治後期における「新婚旅行」は、まだイメージや言葉だけの拡がりに留まっていたことがわかった。

今後はさらに大正期に焦点をあて、拡大していく新中間層を対象とし、新しく創刊される婦人雑誌等において「新婚旅行」がどのように語られていくのか検討をしていきたい。

参考文献

- 東義晴 2004 「明治期におけるリゾートの形成－海水浴の普及家庭に着目して」『流通経済大学社会学部論叢』15(1) 流通科学大学
- 由山輝雄 2002 『海外旅行の誕生』吉川弘文館
- 千勝義重 1910 『理想と結婚』楽山道
- 千葉天舞 1908 『新婚無銭旅行』大学館
- 道前美佐緒 2014 「尾張の婚礼風習の再生の提案」『名古屋文化短期大学研究紀要』39, 名古屋文化短期大学
- 藤森清 1997 「明治三十五年・ツーリズムの想像力」『メディア・表象・イデオロギー：明治三十年代の文化研究』小沢書店
- 藤田一郎 1900 『新撰結婚式』報文社
- 五井信 2000 「書を持って、旅に出よう－明治三〇年の旅と<ガイドブック><紀行文>」『日本近代文学』84, 日本近代文学学会
- 平井太郎 2011 「東京の大神宮：貨幣の月関・消費の場としての「家」とその変容」『専修人間科学論集』vol.1, No2 専修大学人間科学学会
- 広田栄太郎 1969 『近代訳語考』東京堂
- 井上輝子 1998 「恋愛観と結婚観の系譜」『日本女性史論集 4 婚姻と女性』吉川弘文館
- 石川半山 1906 『世界的大競争』金尾文淵堂
- 伊藤壮 1965 「不況と好況のあいだ」南博編『大正文化』勁草書房

- 今野信雄 1986『江戸の旅』岩波書店
- 小山静子 1999『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房
- 黒岩比佐子 2007『食育のススメ』文藝春秋
- 前田愛 1990「江山淘美は吾郷」『前田愛著作集』第6巻, 筑摩書房
- 松下祐三 2002「薩長商社計画と坂本龍馬：坂崎紫瀾の叙述をめぐって」『駒澤史学』59 駒澤大学
- 森岡清美 2004「都市下層と新中間層」『週刊朝日百科 日本の歴史』102 朝日新聞社
- 牟田和恵 1996『戦略としての家族』新曜社
- 村井弦斎 1913『食道楽続編 秋の巻』報知社
- ノッター、デヴィッド 2007『純潔の時代－近代家族と親密性の比較社会学』慶応大学出版
- 野崎左文 1892『東海東山漫遊案内』博文館
- 坂崎鳴々道人 1883『汗血千里駒第3編』撰陽道
- 佐伯順子 2010『色』と「愛」の比較社会学』岩波書店
- 瀬地山角 1996『東アジアの家父長制－ジェンダーの比較社会学』勁草書房
- 下川耿史編 2000『明治・大正家庭史年表』河出書房新社
- 篠原嶺葉 1907『家庭小説 新婚旅行』大学館
- 白幡洋三郎 1996『旅行ノススメ』中央公論社
- 新声社編 1901『新婚旅行』新声社
- Sugiyama Takie Lebra 1993 *ABOUT THE CLOUDS :Status Culture of the Modern Nobility:*
University of California Press (=2000 竹内洋 海部優子 井上義和訳『近代日本の上流階級－華族のエスノグラフィー』世界思想社)
- 武田桜桃 1911『結婚の枝折』三立社
- 津金澤聡広 1996「近代地方新聞の事業活動」津金澤聡広編『近代日本のメディアイベント』
- Veblen, Thorstein 1899 *THE THEORY OF LEISURE CLASS* (=1961 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店)
- 山本武利 1967「明治三十年代前半の新聞読者層」『新聞学評論』16, 日本マス・コミュニケーション学会
- 山根宏 2008「恋愛」をめぐって－明治20年代のセクシュアリティ』『立命館言語文化研究』19(4), 立命館国際言語文化研究所
- 柳父章 1982『翻訳語成立事情』岩波書店